算数科における個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

～子どもたちに選択・決定の機会を設けた授業実践～

令和3年度入学

熊本大学大学院 教育学研究科

教職実践開発専攻 教科教育実践高度化コース

坂本 司

実践報告書要旨

本報告書は、4つの章からなる。第1章では、本実践の背景として、現在の社会が Society5.0 への転換期であること、そして、長寿社会の到来に伴う生涯学習の視点から、自立した学び手の育成の必要性について示している。

第2章では、中央教育審議会(2021)において、自立した学び手の育成に向けて、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実していくことが目指されていることを示している。個別最適な学びについては、中央教育審議会(2021)に加えて、1970年代より実践された個別化・個性化教育の一環で、当時国立教育研究所の所員を務めていた加藤幸次氏によって提唱された指導の個別化・学習の個性化を参考にして示している。協働的な学びについては、中山(2021)を参考に、「cooperation(協同)」と「collaboration(協調)」の両者の意味を包含するものとして考えていくことを述べている。また、協働の方向性として、加藤(2016)を参考に、子どもたちが協働したくなるからこそ協働していくことの重要性について述べている。また、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実していく中で、学びの過程において、子どもたちに選択・決定の機会を設けることが重要である。このことについては、自己決定理論(Ryan&Deci,2000)やコーン(2001)の「3つのC」を基にして論じている。

第3章では、対象学級の児童の実態をもとにして、子どもたちに何を選択・決定させるかを考察し、特に考え方の選択・決定、学び方の選択・決定についての教師の手立てを検討している。その上で、実践を行った結果を考察し、明らかになった課題から改善案の検討を行っている。学び方については、個人で学ぶか協働で学ぶかを選択・決定させることについて検討している。協働で学ぶ際には、「誰と学ぶか」という視点だけでなく、「どの考えをしている子と学ぶか」という視点もあることで、選択・決定の幅が広がることについて、改善案も交えて検討している。

第4章では、本実践の成果と今後の課題を示している。今後の課題については、学習方法だけでなく、学習内容の選択・決定について考えていくことで、子どもたちの興味・関心に応じて、子どもたちが学びたいことを学んでいくことに繋がることを述べている。